

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 6日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤B

研究期間：2010～2012

課題番号：22390410

研究課題名（和文） 模擬患者役割特性ストレスを軽減する医学・看護学共同養成プログラムの開発

研究課題名（英文） Development of Medical and Nursing Cooperative Training Program to Reduce Stress of Simulated Patient Role

研究代表者

清水 裕子 (Hiroko Shimizu)

香川大学・医学部・教授

研究者番号：10360314

研究成果の概要（和文）：

1. 海外の知見収集のため、研究者4名でニュージャージー州立ラトガース大学を視察した。米における看護学の標準的シミュレーション教育とSPの養成実態、およびSPのインタビューを実施した。結果、米では、標準的なシミュレーション教育は、モデルであり、日本とは異なり圧倒的に高価なモデルが配備され、SPの役割は大きくはなかった。養成は個別教員により行われ、学習協力者であるため、体系的なストレス軽減策は講じられていない。

2. 2007年から2011年のpub medでSPをtitle中に含む文献を検討した。SPの活用対象は新たな対象に用いられる傾向があった。

3. 模擬患者役割特性ストレスの調査をK大SP研究会で調査を実施した。結果、「マジックミラーを用いた面接個室化による模擬患者(SP)の面接ストレスの変化」として第44回日本医学教育学会で発表した。SPは11名で、データはマジックミラーで面接室を個室化する前後で、7件法の自記式質問紙調査によりSPから収集した。質問項目のうち2)フィードバックがストレス、のみが面接後に有意に低下したが（前： 4.4 ± 1.6 vs 後： 3.6 ± 1.5 , $p=0.018$ ）、他の項目には全て有意な変化はなかった。医療面接においてマジックミラー面接個室化によるとSPがフィードバックストレスを減じることができる。また、同対象に実施したMBTI検査とフィードバックについて、「SPの役割特性ストレスや心的過程と性格タイプとの関連の検討」として上記学会で発表した。MBTIは新しい試みとして多くの聴衆があった。協力者は、対象は、同意を得たSP10名であった。調査は、MBTI性格検査(2件法60項目)とSP役割特性質問紙7件法20項目であった。測定用具は、性格検査MBTI性格検査FormMである。結果、SPの性格タイプによりストレスが異なり、養成過程で性格を考慮する必要がある。

研究成果の概要（英文）：

1. To gather views from overseas, four researchers visited Rutgers University, The State University of New Jersey in order to observe standard simulation training and training of simulated patients (SPs) in nursing in the USA. SPs were also interviewed. Results showed that standard simulation training in the USA uses models, with overwhelmingly expensive models provided in contrast to Japan, and the role of the SP was minor. Training was conducted by individual instructors, who cooperate with training, so no systemic stress reduction policy was implemented.

2. Pub Med was searched from 2007 to 2011 for literature containing 'simulated patient' in the title. The trend was for fields using SP to be new fields.

3. A survey of stress particular to the simulated patient role was conducted in Japan

by the SP Study Group of K University. The results were presented at the 44th annual meeting of the Japan Society for Medical Education as ‘Changes in interview stress of simulated patients (SP) due to using magic mirrors to create private interview rooms’. SPs participating in the survey comprised 11 persons, with data collected from the SPs before and after using a magic mirror to create a private interview room, using a self-completed questionnaire applying a 7-point scale for answers. Among the question items, only the answer to question 2) ‘Does feedback create stress?’ declined significantly after the interview (before: 4.4 ± 1.6 vs. after: 3.6 ± 1.5 , $p=0.018$), but for all other items no significant difference was found. Feedback stress for SPs can be reduced by using magic mirror rooms for medical interviews. At the 44th annual meeting of the Japan Society for Medical Education, the researchers also presented ‘Evaluation of correlation between stress particular to SP roles and emotional processes and personality’, concerning an MBTI test and feedback for the same SPs as above. A large audience was interested in MBTI as a new method. Ten SPs consented to cooperate with the survey, which comprised an MBTI personality test (60-item 2-point) and an SP role characteristics questionnaire (20-item 7-point). The measurement tool used was the MBTI (Myers-Briggs Type Indicator) questionnaire Form M. Results showed that stress varied according to the personality type of the SP, therefore should be taken into consideration during the training process.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
22年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
23年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
24年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
年度			
年度			
総計	12,900,000	3,820,000	16,720,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：(1)模擬患者 (2)SP ; Simulated Patient (3)ヒューマン・シミュレーション・クライアント (4)看護学教育(5)モデル(6)マジックミラールーム(7)MBTI性格検査(8)心理学的方法

1. 研究開始当初の背景

模擬患者は1968年にBarrowsが開発¹⁾し、日本では70年代から医学部で活用され始めた。看護では80年代から医学教育の影響を受け、80・90年代と看護系雑誌で普及のための特集が組まれた。看護学では全国的な統一試験はないが、対話技法や技術学習、看護過程などに活用がすすんでいる。

分担研究者らは、香川大学において、2001年から9年間にわたり、模擬患者の養成と活用を行ってきた。特に、模擬患者の養成では、相互評価と共に実地における研修を重視してきた²⁾。

研究代表者は、2002年から看護系大学の教員らでSP・OSCE研究会を発足させ、日本看護学教育学会で4回の交流セッションを開催、04年雑誌「看護教育」で特集、09年、雑誌「看護展望」³⁾に1年間の模擬患者活用方法の連

載を行った。同年、学研全国セミナーで、東京SP研究会の模擬患者による「認知症ケアのための対話技法実演」⁴⁾を行い、ブログでも紹介し普及を図った。

海外での模擬患者養成は、特に米では、自校と専門機関養成が行われている。高度な演技は、専門機関養成に託されており、また役者による演技も取り入れられている。養成研修は、個々に工夫がされており、標準的な養成プログラムはない。(基盤Cの成果)

日本での養成は90年代に専門機関養成が開始され、特に医学では2005年の共用試験実施に向けて、大学の自校養成が進んだ。医学が先行している模擬患者養成は、看護学の活用増加に伴い、ますます人材が求められると推察され、医学看護学共同で活用可能な養成が急務である。

2. 研究の目的

1) 医学・看護学教育における模擬患者の役割特性ストレスを明らかにする。

2) 模擬患者の性格タイプと役割特性ストレス、自己効力感の関連を明らかにする。

3) 模擬患者への介入と構築したプログラムの成果評価

3. 研究の方法

1)

① (文献研究) 模擬患者は、身体診察(フィジカルアセスメント)、医療面接、対話学習などの役割、OSCE(客観的臨床能力試験)の評価、評価の水準(形成的、総括的)、シナリオの受容程度などに対する実施後のストレスと、これを考慮した研修項目について、先行研究を調査する。

② (質問紙調査、インタビュー法) 国内で活動する模擬患者(自校養成と専門機関養成)の演技に関連したストレス(例えば、評価ストレス、シナリオ受容ストレス、対話ストレス、身体接触ストレスなど)について調査する。

2)

① 模擬患者の性格タイプ検査を実施し、8つのタイプと役割特性ストレス、自己効力感の関係を調査する。

② 分析にあたって、性格タイプが多用されている米国の学術調査を併せて実施する。また、自校養成や専門機関養成の中で模擬患者のストレスを軽減する方法が実施されているか、またその方法を国内外で調査する。性格タイプ検査は、検査ツールMBTI5)の認定ユーザーである研究代表者が実施する。

3)

① (介入調査) 模擬患者が自己の知覚や態度パターンであるタイプを自覚した上で役割を実施し、その後の役割特性ストレスと自己効力感を評価する。

② 介入対象者の分析では、タイプ自覚前のベースラインデータとの関連を検討する。またとストレス軽減の研修内容を実施し、実施前後を測定して、タイプを考慮した研修内容を同定し、評価する。

4. 研究成果

1) 医学・看護学教育における模擬患者の役割特性ストレスを明らかにする。

結果：協力の得られたSPの平均年齢は、56.30歳±11.02(男性63.20,女性54.80)、SPの経験年数は、5年9.5ヶ月(3ヶ月~23年)経験年数群では、1年未満11名、3年未満11名、10年未満25名、10年以上8名であった。研究への参加回数は、平均31.51±32.90回(n=39)、OSCEの参加回数平均は13.08

±16.54回(n=48)、実習参加回数は40.15±38.30回(n=40)であった。自己効力感は、61.93±7.25、状態不安37.94±9.00、特性不安37.88±6.88であった。

考察：自己効力感に影響する要因は、OSCE前の教員相手の練習ストレス模擬患者役割への参加は、負担感を感じる、適性への悩み、面接実習での観察ストレスであった(調整済みR²=0.346)。OSCE前に教員との練習でストレスが高い人は、効力感が高い。しかし、適性に悩んでいる人や面接実習で見ているときにストレスを感じる人は、効力感が低い。状態不安に影響する要因は、OSCE演技中のストレス、面接実習での教育への貢献感であった(調整済みR²=0.317)。OSCE演技のストレスが高い人は状態不安が強く、面接で教育に役立っていると感じる人は不安が強くない。状態不安は、男女とも不安得点は大学生標準得点より低かったが、性差がみられた(p<0.05、男性42.30±5.62、女性36.99±9.36)。

特性不安に影響する要因は、OSCEへの参加は日常生活上のストレスであった(調整済みR²=0.234)。日常的にストレスを感じる人は、特性不安が高い。

2) 模擬患者の性格タイプと役割特性ストレス、自己効力感の関連を明らかにする。

方法：調査協力者は、縦断調査に同意し、協力の同意を得たSP10名であった。調査は、MBTI性格検査FormM(2件法60項目)とSP役割特性質問紙7件法20項目であった。分析方法は、ノンパラメトリック法によるスピアマンの順位相関係数ρを用いた。倫理的配慮として、研究者所属の倫理委員会の承認を受け、実施に際し調査協力者に説明を行い書面による同意をえた。

結果：サンプルサイズからρ=0.4以上が関連を示すものとして検討した。外向内向指標の違いでは、OSCE実施後ストレスやOSCE参加を日常生活ストレスと感ずること、面接観察者応答ストレス・面接後反省会ストレス、満足感、社会貢献感において、内向が外向より否定的な相関を示した。JP指標の判断的態度をとる人は、OSCEの演技中や実施後のストレス、面接での観察者応答や反省会のストレスと相関を示した。役割演技に経験を活用するのは、直感機能と相関を示した。また、TF指標で思考機能を使う人は、OSCE実施後や面接実習でのストレス、負担感で否定的な相関を示した。

考察：SPの関心の向け方や外界との接し方のスタイル、結論の導き方の各指標の特徴は、ストレスや負担感などにおいて対極の傾向をもたらす。外向の場合、人や出来事などの外界に関心があるため、内向のように自分の内面に注意を払わず、ストレスを自覚しに

くいと考える。判断的態度で外界と接する人は、計画や秩序に基づく行動を好み、周囲を統制しようとするが、SPは主体的に統制できないための結果と考えられる。しかし知覚的態度を指向する人は、状況に応じて行動するためストレスを感じにくい。また思考機能を使って結論を導く人は、結果を論理的に考えるため実施後ストレスを感じにくいと考えられる。ゆえに、SPの性格タイプによりストレスが異なることを考慮する必要がある。

3) 模擬患者への介入と構築したプログラムの成果評価

模擬患者に演技役割から来るストレスの種類と調査の結果をフィードバックした。これを踏まえて、3回にわたる養成研修会を開催した。

①目的 SP活動における役割期待の理解を深め、演技の向上をめざす。

協力者 香川大学医学部 SP研究会

期日 2011年3月15日(火) 16:00-17:30

会場 香川大学医学部講義棟1階医療面接室
内容 「よりよいフィードバックのための役割イメージを形成する」

②開催日 2011年9月20日(火) 16:00-17:30

開催場所 香川大学医学部看護学科棟305室
内容 性格タイプ MBTI 検査の実施とフィードバック

③開催日 2011年11月15日(火) 16:00-17:30

開催場所 香川大学医学部看護学科棟305室

内容 性格タイプ MBTI 検査のフィードバック2:タイプダイナミクスについて

以上のことから、MBTI性格検査を理解し、それぞれのSPが自己と他SP、あるいは学生との関係を性格の特性や思考スタイルから検討し、フィードバックなどの参考とした。

SPからはこれまで人柄や能力と思われたことが、実や思考スタイルなどの個人の特徴が影響してのものであることを理解し、それぞれの個性に配慮したSPを演じることができるようになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 7件)

1) Hiroko SHIMIZU, Hiroki OKADA, Hisashi MASUGATA, Takami KINSHO, Eiko NOGUCHI, Miharuru OGASA, Shoichi SENDA, Evaluation of Magic Mirror Room Effectiveness in Nursing Objective Structured Clinical Examination, Interprofessional Partnership: Improvement for Global Health

Outcomes, 2012/09/05~2012/09/06, Chiang Mai, Thailand.

2) 清水裕子, 岡田 宏基, 舛形 尚, 余島郁子, 千田 彰一, SPの役割特性ストレスや心的過程と性格タイプとの関連の検討, 日本医学教育学会第44回学術集会, 2012/07/27~2012/07/28, 神奈川県横浜市.

3) 舛形 尚, 清水裕子, 岡田宏基, 筒井邦彦, 余島侑子, 犬飼道雄, 樋本尚志, 合田文則, 千田彰一, マジックミラーを用いた面接室個室化による模擬患者(SP)の医療面接ストレスの変化, マジックミラーを用いた面接室個室化による模擬患者(SP)の医療面接ストレスの変化, 2012/07/27~2012/07/28, 神奈川県横浜市.

4) 清水裕子, 岡田 宏基, 舛形 尚, 千田彰一, Simulated Patient 役割におけるストレスの検討, 日本ヒューマン・ケア心理学会第14回大会, 2012/07/15~2012/07/16, 東京都文京区.

5) 舛形尚; 清水裕子; 岡田宏基; 筒井邦彦; 余島侑子; 犬飼道雄; 樋本尚志; 合田文則, 模擬患者(SP)による医療面接ストレスの検討, 第43回日本医学教育学会大会, 2011/07. 広島市.

6) 筒井邦彦; 清水裕子; 岡田宏基; 舛形尚; 千田彰一; 余島郁子, SP活動の参加動機に関する検討, 第43回日本医学教育学会, 第43回日本医学教育学会, 2011/07. 広島市.

7) 清水裕子; 筒井邦彦; 岡田宏基; 舛形尚; 千田彰一; 余島郁子, SPの演技ストレスに関する要因, 第43回日本医学教育学会大会, 2011/07. 広島市.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 裕子 (Hiroko Shimizu)

香川大学・医学部・教授

研究者番号: 10360314

(2) 研究分担者

岡田 宏基 (Hiroki Okada)

香川大学・医学部・教授

研究者番号: 00243775

舛形 尚 (Hisashi Masugata)

香川大学・医学部附属病院・講師

研究者番号: 70263910

千田 彰一 (Shoichi Senda)

香川大学・医学部附属病院・教授

研究者番号: 30145049

筒井邦彦 (Kunihiko Tutuia)

香川大学・医学部・准教授・

研究者番号: 50335874

江藤宏美 (Hiromi Eto)
長崎大学・医歯(薬)学総合研究科・教授
研究者番号：10213555